

## ユートピア以後

——政治思想の没落——

ジュデイス・M・シュクラール 著

奈 良 和 重 訳

ヨーロッパ啓蒙思想の前に、重い緞帳が下りてしまった。しかし華麗なる舞台上に酔いしれた観客はその終焉に気づいていない。啓蒙思想と争ったロマン主義やキリスト教社会神学も、そして社会主義でさえも、もはや舞台の奈落に没した。このような現代の精神の状況を背景として、ラディカリズムの崩壊の過程を、政治思想史的にあとづけたのがこの著書である。

△誰でも現代の条件と未来の生活が殆んど決定づけられるのはほかならぬ政治の領域であることを完全に意識している▽のにもかかわらず△今日純粹にラディカルな（政治）哲学と呼ばれ得るようなものはひとつも存在しない。自由主義はいよいよ守勢的となり保守化するとともに、みづからの道德的基礎にも確信を失うようになっていく。――

――自由主義は――心底に抱いている社会的絶望に答えを提示していない▽。社会主義においても△マルクスによって予測されなかった▽△ソヴエト共産主義▽が実在し、そしてあらゆる社会主義者は△マルクス程にはユートピア的ではなく▽、従って△ラディカルな哲学も存在し得ない▽状況下にあるといえよう。

シュクラールは云う△政治がわれわれの実存の各瞬間に突き当たってくる。にもかかわらず――▽われわれはすべて△の伝統的政治哲学の消滅に直面しているのであると。

今日ほど△政治▽が人間の実存にまで深いかわりをもった時代があったであろうか。シュクラールの指摘するようになくともこれほど日常的現実から未来に至るまで政治によって決定づけられることを△意識▽し得る時代はなかったであろう。しかし十八世紀以来の政治哲学は見事に崩壊し去ってしまった。残ったのは即物的現実性をもった△政治▽そのものである。今われわれの△実存▽に突き刺さってくるのは倫理性も△理想像▽も失った△政治▽的現実のみである。

では何がこの崩壊を生み出したのか。いうまでもなくそれは二つの世界大戦によってである。特に原爆とアウシュビッツに象徴される歴史の自己否定によってであり、その

延長線上に位置する世界政治の現実によってである。

われわれの周辺には性急な政治参加を志向する動きを多くみるが、現代政治の構造は安易な行動や意志の表明などがかたのつく問題ではない。世界と人間の運命への根源的な問いから出発しなければ、いかなる政治的行動も許されない時代状況にあることを認識しなければならぬであらう。筆者はシュクラールの見解に必ずしも同意ではないが、少なくとも安易な政治的行動に組するよりは、アブラムソンに始まった政治理論の壮重なる伝統は中絶の状態にある。したがって現在にとっては、理性にもとづく懷疑主義こそ最も健全な態度であるとする彼女の立場の方を支持せざるをえない。

著者ジュデイス・シュクラールは一九二八年の生まれでハーバード大学の哲学の教授である。本書は十数年前、彼女が二十代に著したものであるというが、その問題意識は今日においてもきわめて新鮮であるといえよう。ポーポワールが該博な知識を駆使して「第二の性」を著したように彼女もまた実に多面的な広い知識によって近代政治思想を跡づけている。ロマン派の詩人からエリオットまでの文学者をはじめ、実存主義の代表的な哲学者、キリスト教神学者や政治学者などが動員され、政治思想史としてはまこと

にユニークな著述であるといえる。

彼女はヨーロッパとアメリカの政治思想を専門とする学者であつて、さすが該博な知識もその他の世界、特にアジアについては及んでいないがここで対称となっているヨーロッパの諸思想は、われわれにとってどのような意味をもつであらうか。冒頭で筆者は啓蒙思想の緞帳は下りたと書いたが、なによりも日本の知識人にとって、啓蒙主義は滅んではない。シュクラール自身、合理性にもとづく懷疑主義などと云っているのであるから、啓蒙思想の域を脱したのではないのである。後進的な社会と自覚している日本を含むアジアの諸地域においては、ヨーロッパ近代への恣意性はきわめて強いとみるべきである。ではヨーロッパ乃至アメリカ以外の前近代的諸側面を色濃く内包している社会においては、啓蒙主義はいぜんとして有効であるのかという点、それは知識人の酔夢なのである。なぜなら近代化ということは実はヨーロッパ化なのであつて、それ自体、世界政治の現実的な矛盾の下における敗北主義でしかない。

そして、この問題は伝統仏教教団の今日的な課題と深くかわりをもっている。現代における啓蒙主義の崩壊とユートピアの終焉は、われわれ自身の行動と思维に問われて

いる最も尖鋭なラディカルなテーマなのである。

「ユートピア以後」は、直接的にはアジアの状況を映しだしていないが、十八世紀以来今日までの世界を動かしてきた政治哲学とユートピア主義の崩壊を、 $\wedge$ 啓蒙主義の没落 $\vee$  $\wedge$ ロマン主義的精神 $\vee$  $\wedge$ キリスト教的運命論 $\wedge$ ラディカリズムの終焉 $\vee$ という三つの柱で、その消滅をたどっている。そのなかで特に $\wedge$ 社会神学 $\vee$ と名づけられているキリスト教政治哲学の問題は、われわれにとってきわめて重要な意味をもつものであろう。啓蒙思想への攻撃的自己展開は、仏教哲学にとつていまだ経験したことのないものである。

今われわれが直面している七〇年問題も、政治哲学の不在という根源的な状況とかわかって、きわめて困難な課題となつていたのである。 $\wedge$ 悪 $\vee$ とは $\wedge$ 政治の擬制 $\vee$ のことであり、東大における一月十九日のシンボリカルな政治状況は、あらわにそれを示しているのである。 $\wedge$ 平和 $\vee$ という言葉の示す概念さえ、もはや崩壊し去つていく。それ自体は何ものをも意味していないのである。シュクラールは「伝統的に政治理論は、権力と正義についての概念、この二つの極をめぐって廻転してきた。さまざまな権力構造やさまざまな正義の概念に関する純粹に經驗的研究は勿論多

量に存在し得るし、現に存在しているが、これらは理論的図型につけ加わるものではない。正義について語ることは思想的に冒険を犯すことになった。——政治的正義概念そのものが道徳的命令を含んでいる——そしてそれ自体として実在すると認められるものを超えた目的なのである。正義の概念自体が無意味だということをわれわれが容認しないとすれば、せめて僅かのユートピア主義が要求される——そして——このユートピア主義というものが今日不在なのである」と。

政治哲学といおうと、概念といおうと、それは思想家の机上で生みだせるものではない。そのこともまたあのシンボリカルな一・一八事件が示していたのではないだろうか。擬制を實証してみせるのも批評家の文章によってではなく、自からの行為によって實証しているのである。自由主義諸国・社会主義諸国を問わず、そして後進地域諸国においても、学生運動は新しい動向を示しはじめた。この大衆的な運動はラディカリズムの崩壊・ユートピア主義の終焉、擬制の自己暴露という、政治哲学の没落状況と関係づけなければ理解できない問題なのである。

シュクラールは啓蒙的合理主義の限界のなかでこの状況へアプローチを試みている一人であるといふことができよ

う。また彼女によってロマン主義は△自然と社会の△他者性▽へのたんなる隷従▽という敗北の名を負わせられていくが——事実それは啓蒙的合理主義と同じような敗北を結果としていても——なおかつ現代の状況への挑戦を忘れてはいない。いかなる思想的系譜に立っていようと、現代の△状況▽を度外視して思想的営為が成りたつわけはない。キリスト教哲学もまた同様である。そしてわが仏教哲学も、この△状況▽のなかへ投げ入れられることによってしか甦るみちはないであろう。

政治に対して、あえて懐疑主義の立場を支持せざるをえないのは、哲学不在の政治行為は△悪▽への加担、△擬制▽への隷従しかもたらさないからである。

われわれにとって△宗教▽の問題が課題であるとするならば、キリスト教△社会神学▽に対する△仏教哲学▽は無防禦である。例えば△平和▽について協同の場をもったとき、われわれは△神学▽による△平和の概念▽の支配下に入る以外にみちはない。そのことを考慮せずに、われわれの△平和▽の理念も行動も自立しえないのである。そして△正義▽不在の政治的現実——△擬制▽の側からは、まるまるのみこまれたうえて△手段▽として隷従を強いられるであろう。

このような問題について反省を試みるために△ユートピア以後——政治思想の没落——▽の紹介を借りて問題を提起したわけである。この著書を啓蒙主義からの現代への解答として受けとるとともに、他にも現代への政治哲学的アプローチの諸説を求め、それを批判的に摂取しなければならぬまい。(紀伊国屋書店刊)

丸山 照雄

## 孤独な群衆 何のための豊さ

リースマン 著  
加藤 秀 俊 訳

この二つの著書は、著者自身が日本語版の序文で指摘しているように「アメリカ論のひとつ」であると同時に、われわれにとってはむしろ△アメリカ▽そのものであり対象的△素材▽である。素材という意味は、月の岩石のかけらがわれわれにとって月を知る素材であるように、リースマンの思考とその著作は、われわれにとってアメリカのかけ